

英語の not 話題化構文に関する統語分析*

本 多 尚 子

1. 導入

英語には、主に口語ではあるが、同一文中に二つの否定辞が表出するにも拘わらず単純否定として解釈される (1) のような例が存在する。

(1) A: I think I will smoke a cigarette.

B: Not in my car you won't. (Culicover 1999: 182)

Culicover (1999) では当該構文 ((1) の B の文) を not 話題化構文 (*not-topicalization construction*), そして文頭の話題句を not 話題句と呼んでおり、本稿もそれを踏襲する。not 話題化構文では、いわゆる否定呼応 (*negative concord*) が生じ、複数の否定辞で単純否定を表している。より具体的に言えば、文頭の not のみが否定の意味を持っており、いわゆる構成素否定の not が機能している¹。否定呼応自体は黒人英語などの非標準英語でも、*you don't want no trouble* “面倒は避けて”などの多重否定の例で見られるが、not 話題化構文は主に口語ではあるものの標準英語話者による使用も多く観察されるという点で非標準英語の多重否定の例とは区別されるべきである。また、not 話題化構文は not 話題句が文頭を占めるという点では否定倒置構文と似ているが、主語・助動詞倒置が生じない点と、音調型について not 話題句が下降、基底文 (主節) の否定部が上昇となる (Quirk et al.

* 本稿の執筆に際し大変貴重なご指摘・ご助言をいただいた匿名の査読委員の先生方に厚くお礼申し上げます。なお、本稿に関する不備及び誤りは全て筆者の責任による。

(1985)) 点で明確に異なる。

本稿では、英語の not 話題化構文の統語的・情報構造的特性をまとめた上で、それらを説明可能な統語分析を提案する。2節では、英語の not 話題化構文に関する言語事実を統語的・情報構造的観点から整理する。3節では、英語の not 話題化構文に関する先行研究を概観し、問題点を指摘する。4節は、英語の not 話題化構文に関する統語分析を提案する。5節はまとめである。

2. 英語の not 話題化構文に関する言語事実

2.1. 情報構造的特性

Huddleston and Pullum (2002) によると、not 話題化構文において not 話題句は聞き手の了解していない新情報であり、通常の話題句が談話上の旧情報を焦点化しているのとは異なる。このことは not 話題化構文と一般の話題化構文との音調の違いからも示唆される。not 話題化構文は聞き手にとっての新情報である not 話題句に下降の、それ以外の部分に上昇の音調が与えられる一方、一般の話題化構文では談話上の旧情報である話題句には上昇の、それ以外の部分には下降の音調が与えられている。また、天沼 (2010) によると、(2) で示されるように not 話題化構文の基底文は否定文でなければならないが、一般の話題化構文にはそのような制約はない。

- (2) a. *Not to me, you have.
b. To me, you have/haven't. (天沼 2010: 48)

2.2. 統語的特性

not 話題化構文が示す統語的特性の一つとして、まず not 話題句の内部構造に対する制約が挙げられる。(3) で示されるように、not 話題句としては NP, PP, AP, AdvP は許される一方、VP は許されない。

- (3) a. Not that one you won't. (NP)
b. Not in my car you won't. (PP)
c. Not that tall he isn't. (AP)

- d. Not that quickly you won't. (AdvP)
- e. *Not eat the cake you won't. (VP)
- f. *Not eating the cake he isn't. (VP)
- g. *Not eaten the cake he hasn't. (VP) (Culicover 1999: 183)

not話題句としてVPが許されないことに関してはGoldsmith (1985)においても言及されており、(4)の例が挙げられている。

- (4) A: Can I borrow the car tonight?
- B: *Not borrow the car you can't. (Goldsmith 1985: 140)

本稿では、(4)のBの文でnot話題句として現れるVP (borrow the car) が既にAの文で言及されているという点に注目する。(4)と同様に、(1)でもBがしてほしくない行為であるsmoke a cigaretteはAの文で既に言及されており、当該のVPは聞き手にとって了解済みの旧情報である。従って、聞き手にとって了解済みの旧情報であるVPがnot話題句として現れることは、not話題句に課される情報構造上の制約、すなわち、not話題句は聞き手にとって了解されていない新情報でなければならないことと矛盾しているため、非文法的となると考えられる。

第二に、(5)で示されるように、not話題句のnotとXPとの間に副詞などの挿入要素は介在することはできず、両者の間には隣接性が要求される。

- (5) a. *Not certainly in my car you won't.
 - b. *Not, I don't think, with that hammer you won't.
 - c. *Not, this week, before lunch you won't.
 - d. *Not, if I say anything about it, that one you won't.
- (Culicover 1999: 183)

また、(6)のように、not話題句位置にnotのみが生じることは不可能である。

- (6) *Not you won't. (Culicover 1999: 183)

第三に、not 話題化構文内での否定極性項目 (negative polarity item 以下, NPI) の認可に関して (7) 及び (8) のような事実が観察される。

- (7) a. Not anyone that I know you won't.
- b. Not in any of my shoes you won't.
- c. Not after you talk to anyone you won't.
- d. Not in my car with anything like that you won't.

(cf. Culicover 1999: 183-184)

- (8) a. *Not then anyone won't.
- b. *Not before lunch any officials won't.
- c. *Not in my car you won't with anything like that.

(cf. Culicover 1999: 184)

(7) では、not 話題句内及び当該話題句に随伴し前置された要素内の NPI は全て認可されている。それに対し、(8) では、not 話題化構文の基底文内に留まる NPI はいずれも認可されない。特に、(8c) は、基底文の won't が一見すると NPI を c 統御可能な位置にあるにも拘わらず容認されていない。他方、Culicover (1999: 185) では、(8) とは対照的に、not 話題化構文の基底文内の目的語項にある NPI に限り基底文の否定要素に認可される例として (9) を挙げている。これらの対比をどのように理論的に説明するかについては、本稿 4 節で詳しく述べる。

- (9) a. Not Eddie I didn't find any pictures of.
- b. *Not Eddie I found no pictures of.
- c. Not Eddie no one found any pictures of. (Culicover 1999: 185)

not 話題化構文の基底文にもまた、興味深い特徴が見られる。not 話題化構文の文頭の not の作用域は not 話題句及び当該話題句に随伴し前置された要素内に留まり、否定倒置構文のように文全体には及んでいない。また、例えば Never does he do such a thing. で見られるような主語・助動詞倒置は (10) で示されるように生じない。

- (10) a. *Not in my car won't you (smoke a cigarette).
 b. *Not Eddie won't you (talk to). (天沼 2010: 50)

また、基底文の won't の後の動詞句は削除を伴うことが多いが、Culicover (1999) では (11) のような例を挙げ、必ずしもこうした削除は義務的ではないことを示している。

- (11) a. Not that one you won't eat.
 b. Not in my car you won't smoke a cigarette.
 c. Not that quickly you won't fix the faucet. (Culicover 1999: 185)

さらに、天沼 (2010) は (12) – (15) の例を挙げた上で、当該動詞句が削除されない場合でもその内容は文脈から予測可能な情報でなければならないようであるとしている。

- (12) David: What about just now?
 Maddie: What about just now? I thought it was him. I didn't know it was you.
 David: Maddie, you said some things that—
 Maddie: And you didn't. Nothing. Not during the whole thing, David, you haven't said a word.
 (*Moonlighting*, “I Am Curious...Maddie”) (天沼 2010: 50)
- (13) Malory: I love you, and I wanna marry you. (Punches Nick's heavy bag.) And if I wanna get married, I can get married, and nobody can tell me I can't. (Punches the bag again.)
 Nick: Not with a right like that, they ain't gonna tell you.
 (*Family Ties*, “Mrs. Wrong (Part 1)”) (天沼 2010: 50)
- (14) A: I hope I can relax and be myself.
 B: Not in my room you can't (*smoke a cigarette). (天沼 2010: 50)
- (15) A: Is there anything I can't do in your car?
 B: Not in my car you can't smoke. (cf. 天沼 2010: 50)

(12) では、you haven't に後続する said a word は削除されていないが、その内容は文脈からも十分予測可能な解釈となっている。同様に、(13) も they ain't に後続する gonna tell you は削除されていないが、その内容は文脈からも十分予測可能な解釈となっている。(15) も you can't に後続する smoke は削除されていないが、その内容は文脈から十分予測可能な解釈となっている。対照的に、(14) では smoke a cigarette は文脈から十分予測可能とは言えないため、当該動詞句は義務的に削除される。このことは、情報構造上の観点からも、本稿で既に述べた not 話題句そのものは聞き手の了解していない新情報であるという事実と対照的である。not 話題化構文の基底文は文脈から予測可能な談話上の旧情報であり、not 話題句と基底文との間には情報構造上も隔たりが見られる。

not 話題句が文頭に生じているにも拘わらず主語・助動詞倒置が生じないという点、そして not 話題句そのものは聞き手の了解していない新情報である一方、not 話題化構文の基底文は文脈から予測可能な談話上の旧情報であるという点から、このような not 話題句と基底文との間の統語上・情報構造上に明らかな隔たりがあるという言語事実を説明可能な分析が求められる。しかしながら、当方が知る限りの not 話題化構文の先行研究において、こうした事実には、そのメカニズムも含め十分な説明がなされたとは言い難い。以下の3節では、not 話題化構文について言及している先行研究を概観し、問題点を指摘する。

3. 先行研究

3.1. Lawler (1974)

Lawler (1974) では、not 話題化構文の例として (16a) を挙げ、それと (16b) 及び (16c) の例とを比較することでその特徴を捉えている。

- (16) a. Not any good ones, he hasn't.
b. *Some/*Any good ones, he hasn't.
c. *Not any good ones, he has. (Lawler 1974: 361)

(16a) と (16b) から、not 話題化構文では先行の話題句に必ず not が必要で

あり、NPIのanyをsomeに変更しても冒頭のnotは削除できないことが示される。また、(16a)と(16c)から示されるように、後続する基底文のnotを削除することもできない。

Lawler (1974) では、特に前者の特徴が(17)のような補文繰り上げ(sifting)とも共通に見られる点に着目し、両者を並行的に捉え、先行の話題句not XPが後続部分の節から移動されたものと分析する。

- (17) a. Bill hasn't written any good papers, I don't think.
 b. Bill hasn't written any good papers, I think.
 c. *Bill has written some/any food papers, I don't think.
 (Lawler 1974: 361)

(18)はLawlerの提案するnot話題化構文の構造である。

- (18) [S [S [V Not] [NP that]] [S [NP he] [VP didn't]]] (Lawler 1974: 367)

しかしながら、この分析には問題がある。五十嵐(2020)も指摘しているが、Lawler(1974)では、(17)のようなsiftingの例とnot話題化の例とを並行的に扱っているにも拘わらず、前者は(17b)で示されるようにnot話題句を除く基底文のNP-VP ([S NP VP])に否定が不要な例がある一方、後者では基底文のNP-VPの否定は義務的であるという違いがある。こうした違いが生じるメカニズムをLawler(1974)の構造では説明できない。

3.2. Culicover (1999)

Culicover(1999)では、(19)と(20)で示されるように、文頭のnotがnot話題句内のNPIのみ認可可能であり、かつ、基底文の主語内にあるNPIが認可されないという言語事実に着目し、(21)の統語構造を提案する。(21)は例文に合わせnot話題句がPPの場合の構造を示す。

- (19) a. Not anyone that I know you won't. (= (7a))
 b. Not in any of my shoes you won't. (= (7b))
 c. Not after you talk to anyone you won't. (= (7c))

d. Not in my car with anything like that you won't. (= (7d))

(cf. Culicover 1999: 183-184)

(20) a. *Not then anyone won't.

b. *Not before lunch any officials won't. (Culicover 1999: 184)

(21) Not in my car with a hammer you won't.

[_{IP} [_{PP} not [_{PP} in my car] [_{PP} with a hammer]] [_{IP} [_{NP} you]

[_I [_I won't]]] (Culicover 1999: 184-185)

(21) では、文頭の not が c 統御できる領域は PP (in my car with a hammer) のみであり、基底文の主語項内は含まれないため、前述の言語事実が説明されるとしている。

しかしながら、Culicover (1999) の分析にも問題点がある。Lawler (1974) や天沼 (2012) などでも述べられているように、not 話題化構文は、原則として主節に限られるいわゆる主節現象である。そのため、(22) で示されるように従属節や等位節では厳しく制約されている。

(22) a. I thought they did that everywhere, but she told me that (*not) in France they don't.

b. In England, they do, but (*not) in France they don't.

(Lawler 1974: 363)

Culicover の提案する構造では、なぜ not 話題化構文がこのような制約を受けるのかを説明できない。また、not 話題句としてなぜ VP が許されないのかにも十分な理論的説明は与えられない。

4. 本稿での分析

前述の 2 節や 3 節で扱ってきた not 話題化構文が持つ統語的・情報構造的な特性を説明するために、本稿では not 話題化構文に関し、概ね (23) のような統語構造を提案する²。(一致操作に関わる素性や文中に NPI を含む場合・含まない場合など、より詳細な部分に関しては (24) - (26) を参照。)

- (23) [_{FocP} [_{XP} not [_{XP} X …]] [_{Foc'} Foc [_{TP} [_{NP} you] [_{T'} [_T won't]]]]]
 (X = N, P, A, Adv (*V))

not話題化構文全体をIP(近年の分析ではTP)と考えるCulicover(1999)とは異なり、本稿ではnot話題化構文を主節のCP領域の投射の一つであるFocus Phrase(以下、FocP)を含む構造であると考え、この考えが正しければ、not話題化構文が原則主節現象であり、従属節や等位節では出現が厳しく制約されていることが正しく予測される。さらに言えば、なぜnot話題句内のXとしてV主要部が許されないのかも、先行文脈で既に共有されていて新情報ではないVは焦点として機能できないためであると説明可能である。また、(23)の統語構造は、not話題化構文の情報構造上の特性、より具体的には、not話題句は聞き手にとって了解されていない新情報であるが、主節は先行文脈で既に共有されている旧情報であるということからも支持される。notとXPとの間に隣接性が要求されるという事実も、notがX主要部の最大投射XPに付加していると考えれば説明される。Culicover(1999)でも意味を担う機能投射(FocP)を仮定しつつ付加が採用されているため、本稿でもFocPと付加の両方を仮定する³。

また、本稿では、not話題句は主節内部から移動され内的併合されるのではなく、最初から[Spec, FocP]位置に外的併合されると考える。言い換えると、not話題化構文は否定倒置構文などに含まれる移動を含んではいない。また、not話題句と一般の話題化構文の話題句との間の違いは、Quirk et al. (1985)で指摘されたnot話題句と一般の話題化構文の話題句との間に音調上の違いが見られるという事実からも支持される。

最後に、not話題化構文においてnot話題句と基底文の否定要素との間に否定呼応が見られる一方、NPIの認可についてはnot話題句内もしくは基底文の動詞の目的語項に限定されるという事実について、(多重)一致操作と関連付け説明を与える。

まず、not話題化構文内にNPIが含まれず、not話題句と基底文の否定要素との間に否定呼応のみが見られる場合について考える。この場合のnot話題句と基底文の否定要素との間の一致操作には、西岡(2007)で仮定されている解釈(不)可能なNeg素性(以下、[uNeg]と[iNeg])と、Cécile(2007)で仮定されている解釈(不)可能なPerformative素性(以下、[uPerf]と[iPerf])

とが関わっていると仮定する。また、本稿ではChomsky (2001)で提案されたProbe-Goal関係に基づく一致操作を採用し、ProbeとGoal共に解釈不可能素性を持つ場合にのみ一致に関してactiveになる(Chomsky (2001: 6))と仮定する。(24)は文中にNPIを含まない場合のnot話題化構文の詳細な統語構造である^{4,5}。

(24) 文中にNPIを含まない場合 (X=N, P, A, Adv (*V))

$$\begin{array}{l}
 [\text{Foc}' [\text{XP not} [\text{XP X} \dots]] [\text{Foc}' \text{Foc} [\text{TP} [\text{NP you}] [\text{T}' [\text{T won}'\text{t}]]]] \\
 \quad [\text{uPerf}] \qquad \qquad \qquad \quad [\text{uNeg}] \\
 \quad [\text{iNeg}] \qquad \qquad \qquad \quad [\text{iPerf}]
 \end{array}$$

(24)では、not話題句のnotが持つ[uPerf]と基底文の否定要素が持つ[uNeg]により、両者が一致に関してactiveになり、互いが持つ解釈可能素性が互いの解釈不可能素性に関し値付けを行う。

ここで注意すべきは、基底文の否定要素の[uNeg]はnot話題句のnotが持つ[iNeg]との一致操作に加わることではじめて値付けられ、基底文の否定要素単独では否定を表すことができないという点である。同様に、not話題化構文が持つ「否定に関係する発話行為の遂行(performative)と結びつく」語用論的機能(天沼(2010)を参照)は、not話題句だけでなく基底文の否定要素を伴ってはじめて十分な効果を発揮するものである。従って、not話題化構文の特性である否定呼応と「否定に関係する発話行為の遂行(performative)と結びつく」語用論的機能について一定の説明が与えられる。前述の一致操作の結果、当該の構文は合法的に生成され、NPIを含まないnot話題化構文は文法的だと説明される。

次に、話題句内にNPIが含まれるnot話題化構文の場合について考える。この場合には、not話題句と基底文の否定要素及びそれらが持つNeg素性とPerf素性に加え、NPIとKlima (1964)やGiannakidou and Etxeberria (2018)らによって仮定される解釈(不)可能なPolarity素性(以下、[uPol]と[iPol])によって説明される(当該素性に対し、Klima (1964)やHorn and Kato (2000)はPolarityの認可と関わるAffective素性、Giannakidou (1997)やGiannakidou and Quer (2013)、Giannakidou and Etxeberria (2018)はPolarity素性と呼んでいる)^{6,7}。また、NPIを含む構造では、それぞれ異なる

種類の解釈不可能素性を持つ三者、すなわち、not話題句のnotとNPI、そして基底文の否定要素による多重一致操作を仮定する（多重一致操作のしくみそのものはTanaka and Yokogoshi (2010) で採用されているものを援用する）。(25) は話題句内にNPIを含む場合のnot話題化構文の詳細な統語構造である。

(25) 話題句内にNPIを含む場合⁸

$$\begin{array}{l} [\text{FocP} [\text{NP not} [\text{NP anyone that I know}]] [\text{Foc}' \text{ Foc} [\text{TP} [\text{NP you}]] \\ \quad [\text{uPol}] [\text{uNeg}] \\ \quad [\text{uPerf}] [\text{iPol}] \\ \quad [\text{iNeg}] \\ [\text{T} [\text{T won't}]]]] \\ \quad [\text{uNeg}] \\ \quad [\text{iPerf}] \end{array}$$

(25) では、not話題句のnotは[uPerf]と[iNeg]に加え、解釈不可能なPolarity素性[uPol]を持つ一方、NPIであるanyone that I knowというNPは、それ自体単独で否定を表すことができないという点で基底文の否定要素と同じく[uNeg]を、そして解釈可能なPolarity素性[iPol]を持つ。

注意すべき点は、(24)と異なり、not話題句のnotと基底文の否定要素とのAgreeだけでは、not話題句のnotが持つ[uPol]に値付けすることはできず、not話題句のnotは一致にとって引き続きactiveであるということである。また、NPIであるanyone that I knowも[uNeg]のためにactiveであり、not話題句のnotと基底文の否定要素との間の一致操作に加わることで値付けられることが可能となる。

もう一つの注意点は、Pol素性の一致という観点では、Probeであるnot話題句のnotとGoalであるNPIとの間でProbeがGoalをc統御する関係が保持されているということである。従って、(25)におけるnot話題句内のnotと話題句内に含まれるNPIとの間に見られる認可関係にも一定の説明が与えられる。

三者による多重一致操作の結果、当該の構文は合法的に生成され、話題句内にNPIを含むnot話題化構文は文法的だと説明される。

三者による多重一致操作の結果、当該の構文は合法的に生成され、基底文の動詞の目的語項にNPIを含むnot話題化構文は文法的だと説明される。

ここで、[uPol]素性について、(25)ではnot話題句のnotが持ち、(26)では基底文の否定要素が持っているのはそもそもなぜかという疑問が生じるかもしれない。より正確に言えば、[uPol]は否定の形態を持つnot話題句のnotが基底文の否定要素かのどちらかが持ちうるが、(25)で基底文の否定要素が[uPol]を持つ場合、そして(26)でnot話題句のnotが[uPol]を持つ場合には、どちらもそのc統御領域内に[iPol]を含む要素がないため、派生が破綻する。その結果、(25)ではnot話題句のnotが[uPol]を持つ場合の派生のみが、そして(26)では基底文の否定要素が[uPol]を持つ派生のみが許される。

最後に、(8c)のようなNPIが付加詞に含まれている場合について考察する。当該事例については、基底文に残る付加詞は否定辞から一見するとc統御される位置にあると考えられることから、NPIが認可されると誤って分析されるように思われる。しかしながら、NPIが付加詞に含まれている場合に当該付加詞が導入される位置は、[Spec, FocP]ではなく、さらに高い位置、FocPの付加位置であると仮定すれば、当該位置は実際には主節の否定辞からc統御されずNPIは認可されないと正しく分析される¹⁰。

5. まとめ

本稿では、英語のnot話題化構文の統語的・情報構造的特性をまとめた上で、それらを説明可能な統語分析を提案した。本稿で提案する分析を仮定すれば、not話題化構文で否定呼応が生じるメカニズムやnot話題句に見られる範疇選択特性、not話題化構文内でのNPIの振る舞いといった統語的特性に一定の説明を与えることが可能になる。また、not話題句と基底文の情報構造上の位置づけの違いや、not話題化構文が持つ「否定に関係する発話行為の遂行と結びつく」(天沼(2010))語用論的機能についても説明可能となる。

注

1. 匿名の査読者より、本稿で扱われる not 話題化構文の話題句と主節の間の音声上のポーズの有無はどのようになるのかという質問をいただいた。この点に関するインフォーマントチェックは今後の研究課題とさせていただきます。
2. Culicover (1999) では IP が採用されているが、近年の分析では TP を採用することが一般的であるため、本稿では TP を採用する。
3. 匿名の査読者より、Rizzi (1997) に基づくカートグラフィー分析では、基本的に付加操作が存在せず、あらゆる統語・意味関係を Spec-head 関係で捉えることが試みられているが、付加を採用しないカートグラフィー分析ではどのようなようになるのかとの質問をいただいた。この点に関しては今後の研究課題とさせていただきます。
4. 匿名の査読者より、(24) で示される派生において、音声上同一の not が真逆の統語素性を持つことが仮定されているが、音声上同一の要素が全く異なる統語素性を持つことが他でもあるのかという質問をいただいた。この点に関して、本稿では統語部門と音韻部門との独立性、つまりそれぞれの部門独自の規則等適用可能性があり得ると考えているため、理論上可能として分析している。当該構文以外にも同様の分析が可能な事例があるかどうかについては今後の研究課題とさせていただきます。
5. 匿名の査読者より、(24) で not 話題句内部の否定辞 not と基底文の文否定の not が c 統御関係にないにもかかわらず一致関係を築けている理由は何かという質問をいただいた。この点に関しては、[Spec, FocP] にある要素から Foc 主要部への素性浸透をさらに仮定することが考えられる。なお、当該素性浸透を可能にする要因として [Spec, FocP] にある要素と Foc 主要部との間の Focus (Foc) 素性の共有が考えられる。素性浸透のタイミングを含め、(24) を派生する仕組みのさらなる精緻化については今後の研究課題とさせていただきます。
6. 本稿では、当該素性の Polarity の認可に関わるという側面を重視し、後者の Polarity 素性という呼称を採用する。
7. 匿名の査読者より、[uPol]/[iPol] について、[iNeg]/[uNeg] は独立して語彙項目に付与することができるのか、それとも素性間の不適合性はあるのかという質問をいただいた。この点に関しては、今後の研究課題とさせていただきます。
8. ここでは便宜上、X=N の場合で構造を示している。
9. ここでは便宜上、X=N の場合で構造を示している。
10. 本稿では、FocP の付加位置から Foc 主要部への素性浸透は生じないと仮定している。この仮定への理論的・経験的証拠の提示については今後の研究課題とさせていただきます。

参照文献

- 天沼実 (2010) 「英語の not- 話題化構文の用法について」『宇都宮大学教育学部紀要』 60: 47-56.
- 天沼実 (2012) 「否定辞付き話題化構文一文断片からの動的分析に向けて—」『宇都宮大学教育学部紀要』 62: 207-216.
- Cécile, de Cat (2007) *French Dislocation: Interpretation, Syntax, Acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- Chomsky, Noam (2001) “Derivation by Phase.” In Michael Kenstowicz (ed.), *Ken Hale: A Life in Language*, 1-52. Cambridge, MA: MIT Press.
- Culicover, Peter William (1999) *Syntactic Nuts*. Oxford: Oxford University Press.
- Giannakidou, Anastasia (1997) *The Landscape of Polarity Items*. Doctoral dissertation, University of Groningen.
- Giannakidou, Anastasia, and Josep Quer (2013) “Exhaustive and Non-Exhaustive Variation with Anti-Specific Indefinites: Free Choice and Referential Vagueness in Greek, Catalan, and Spanish.” *Lingua* 26: 120-149.
- Giannakidou, Anastasia, and Urtzi Etxeberria (2018) “Assessing the Role of Experimental Evidence for Interface Judgment: Licensing of Negative Polarity Items, Scalar Readings, and Focus.” *Frontiers in Psychology* 9: 1-18.
- Goldsmith, John (1985) “A Principled Exception to the Coordinate Structure Constraint.” *CLS* 21: 133-143.
- Horn, Laurence and Yasuhiko Kato (2000) *Negation and Polarity*. Oxford: Oxford University Press.
- Huddleston, Rodney, and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 五十嵐海里 (2020) 「notの繰り返しと not 話題化文」『英語語法文法研究』 27: 21-37.
- Klima, Edward S. (1964) “Negation in English.” In Jerry Fodor and Jerrold Katz (eds.), *The Structure of Language: Readings in the Philosophy of Language*, 246-323. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Lawler, John (1974) “Ample Negatives.” *CLS* 10: 357-377.
- 西岡宣明 (2007) 『英語否定文の統語論研究——素性照合と介在効果』東京: くろしお出版.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, London: Longman.
- Rizzi, Luigi (1997) “The Fine Structure of the Left Periphery.” In Liliane Haegeman (ed.), *Elements of Grammar*, 281-337. Dordrecht: Kluwer.
- Tanaka, Tomoyuki and Azusa Yokogoshi (2010) “The Rise of a Functional Category

in Small Clauses.” *Studia Linguistica* 64: 239-271.

(愛知大学)

shonda@vega.aichi-u.ac.jp